

ブツダ  
仏とは何か

下田正弘

一 はじめに

はじめまして、下田正弘と申します。本日は、今わが国でおそらく最も精力的に仏教の研究が進められ、積極的な発信がなされている大学の一つである、駒沢短期大学・仏教学科の公開講演会にお招きいただきました。ありがとうございます。ここには私の大学時代の先輩もいらっしやいまして、少しばかり話をしにくい気持ちもありますが、自由にしゃべって欲しいというご依頼を信じまして、立っております。

さて、本日は「仏（ブツダ）とは何か」という、短時間に簡単に回答するにはあまりに大き過ぎるテーマを掲げました。私が日頃の研究を通して感じていますことを、むしろ思い切った皆様にお聞きいただき、ともに考えていただいで、皆様からご教示願えればと思っております。

先ほどご紹介いただきましたように、私は大乘の『涅槃経』

という經典の研究を進めてまいりました。ご存知のように、『涅槃経』には大乘經典と初期經典（いわゆる小乗經典）の二種類、二系統があります。「涅槃」はブツダの覚りを指す場合とブツダの入滅を指す場合とがあり、一見するとまったく異なった意味を持ったことばであります。今日はこの問題には触れませんが、そこには当時のインドの世界観、それに基づいたことば遣いの興味深い問題が含まれています。

ともあれこの涅槃ということばをタイトルとする大乘と小乗の二つの經典が存在しております。これまた、一見するとまったく異なる經典なのに同じタイトルを有している不思議があります。従来、この両經典は相互に無関係なものと思われていました。ところがよく調べてみますと、実は両者は深い繋がりがあることが分かりました。それは、今日のテーマである「仏（ブツダ）とは何か」という問題意識によって、はっきりと通底しているのであります。

## 二 三宝の存在

ご承知のように仏教は、紀元前五―六世紀頃の中央インドに実在した、ゴータマ・ブツダあるいはシャーキヤムニ・ブツダと呼ばれる人によって説かれた教えに始まります。この教えは、やがてインド亜大陸を南北に縦断し、一方は、海を越えてスリランカ、そして東南アジアへ、また他方は中央アジアから中国、朝鮮、日本へ、さらにヒマラヤを超えてチベットへと伝播いたしました。異なる時代と風土に受肉化された仏教は、一目見ただけでは、とうてい同じ仏教とは言えないほど多様な姿に至り着きます。そこで「いったい何が本当の仏教なのか」という議論も起こってくるわけですし、そうなりますと各人各様の思いがあり、議論はなかなかまとまらなくなってしまいます。ここではその問題に踏み込むつもりはないのですが、ただ、さまざまなヴァリエーションがある仏教において、最低限の共通項は何かと問われるなら、それは「三宝の存在」であると考えられること、それだけを申し上げておきましょう。

仏宝、法宝、僧宝の「三宝に帰依をする」ことによって人々は仏教徒になっていく。時が経ち、社会宗教となった段階の、生まれながらの仏教徒でない限りは、この入信は世界各地の仏教で共通する出来事でありましょう。

そうしますと、帰依の対象である三宝は、仏教徒にとって何らかの形で「存在」していなければなりませんね。ありもしない世界に帰依をするなど不可能です。では三宝が存在するとは、どんなことを言うのでしょうか。

まず仏、ブツダ。これは本日の課題ですから、後に詳しく考察してみたいと思いますが、帰依をするときの「仏の存在」とは、それによって何が指し示されているのでしょうか。仏像や図像でしょうか、あるいは仏ということばでしょうか、いや、歴史的なブツダ、つまり二千五百年前に亡くなった釈尊のことでしょうか。三宝の筆頭に來るものでありながら、具体的に考えると、何が仏なのか、決めがたいものがあります。

法、ダルマはどうでしょうか。これは教え、あるいはそれによって表された真理であるとすれば、経典や教義としての存在をイメージすることができません。僧、サンガは、修行者としての仏教徒自身を指しますから、これも分かりやすいことばでしょう。

## 三 実在するということ

まずここでわれわれは「何が存在する」ということばをどう理解しているか、少し反省しておきましょう。最も一般的なことば遣いでは、存在する主語となるものは、ほとんど

が物、目に見える物体です。この考え方でいくと、三宝の存在とは、やはり目に見えるもので、仏像なり、経典なり、集団なりになってしまします。

ところが、ちょっと注意をしてわれわれの振る舞いを観察してみますと、けっして見えるものだけを相手としていないわけではないことが分かります。規則や命令など、目には見えない存在があります。また、時に、目に見えるもの以上に何か大きな存在を感じていることがあります。相手がかならずしもはつきりしなくとも、受ける存在感、実在感だけは確かです。しかもそれが強烈な場合があります。宗教経験を見事に分析し叙述したウィリアム・ジェームズは、「見えないものの実在」をその基本テーマに据えました。こうした感覚、経験は、感じる側には確実に存在するものです。

そうしますと、あるものが存在するとは、何であれ実際に「影響を与えること」になる、こう考えてよろしいかと思えます。神、愛、自由、解放、平安、故郷、旅。何でもよろしいのですが、例えばこうした抽象理念であっても、人の心に何かを訴えかけ、実際に影響を与えるとすれば、その観念はその人にとって「存在する」ことになります。周囲に転がっている、はつきりと見える、ありふれたものよりもはるかに大きな影響を与えるとすれば、それはより明らかに「存在するもの」となります。

仏とは何か (下田)

#### 四 仏教徒になるという変化

仏教は開祖に歴史的人物が存在する創唱宗教です。伝播していった当初、人々は自分の伝統に存在した宗教を捨て、あるいはそのままに調和させ、ともかく新しくやって来た仏教に改宗、入信しました。

そこでは何らかの形で回心が起こっていると考えられます。それまでの人生の根拠を転換するのですから、それは回心と表現してもよいでしょう。そしてその転換が、三宝に帰依をするという一事によって象徴されます。もちろんさまざまなレベルの改宗があります。古代においては社会や集団から独立した個人という観念は薄いですから、むしろ共同体としての決定が重きをなし、現在のわれわれのことばで言えば、政治的な強制力による改宗という表現が適切に思える場合もあると思います。しかし、そうした変化を社会自体に引き起こした点については、たとえば為政者に対して仏教側から大きな力がはたらいたこととなります。以前の宗教の世界を超えて新たな宗教を受け入れるのは、いずれにしても画期的な事件でありまして、それが三宝の存在を前提になされているのですから、三宝の存在は、同様に大きな意味を持っているはずであります。

この場合の三宝の存在は、単に目に見えるものが転がって

いるようなあり方をしているものではなく、明らかに受け入れられる主体に、根底の意識を変革するほどに「影響を与える」という意味で存在しているものであります。

先に申しましたように、その場合、教えや真理としての法、それを実践する主体としての僧、サンガは影響を与える当体として比較的分かりやすくイメージされます。つまりそれらが存在することは、容易に肯んぜられます。ところが、ブツダ、仏となるとどうしても抵抗が出てしまふ。仏が存在するとはどういうことなのか。

実は抽象観念であつても一定の影響を与えるという意味では「存在している」のですから、本当はブツダという観念が存在するという答えでも、一応はよろしいと思います。しかし通常、実体思考に慣れている場合、観念が存在すると言いつつ終わられたのでは、単に誤魔化されたのではないか、というお気持ちになられる方も多いでしょう。この点を別の角度から考えてみましょう。

## 五 ゴータマ・ブツダ

ブツダとは何か。この問いに対する答えとしては、現在の仏教学界においては、「仏教の開祖であるゴータマを指す」というのが大勢の意見ではないでしょうか。少なくともこれを拒否する人はまずないでしょう。

(ただ、一言付言しておけば、もしもこの問いを仏(ほとけ)とは何か、と変えたとすればどうなるでしょうか。仏(ほとけ)とは歴史的事実であったゴータマのことを指す、と簡単に割り切れるでしょうか。「ほとけ」という語感からは、もっと別のイメージが湧いてきます。ことばは単なる記号ではありません。別の響きは別の内容を誘発してくることが当然あるのです。ただここではこの問題には入り込まないで、仏と書いてブツダとルビを振りました。現在の学界の認識に立った問題設定に限定したからです。)

さて、ブツダが開祖であるゴータマを意味しているとしますと、ゴータマは歴史のある時期に生まれ、ある時期に亡くなった「人間」ですから、仏に帰依をするとは、過去の人間に帰依をしていることになります。とすれば、今日まで世界各地の仏教徒は、己のまったく窺い知らなかった世界に於て存在した「人間」に、その教えが素晴らしかったという理由で帰依しようとしているのでしょうか。存在せぬ人を思い出の中に留め、あるいは出会ったこともない人を想像の中に作り出し、そこに帰依をしているのでしょうか。もしそうだとすれば、何故そんなことをしなければならないのでしょうか。

繰り返しますが、現在の学界の理解に従えば、ブツダは何よりも歴史上の実在であり、開祖であり、人間です。それで

ある限り、すでに亡くなった人を問題にしていることにならざるを得ません。しかしこの理解は、三宝が存在する、三宝に帰依をする、と言う時のブツダ理解を十全に説明してくれてはいないようです。

## 六 大乘の仏

ブツダがゴータマであることを、暗黙の了解として共有している現在の学界で問題になるのは、大乘經典に説かれるブツダです。初期經典に現れたブツダと大乘經典に現れたブツダでは、確かに相違があります。阿弥陀仏や大日如来など、およそ釈迦仏とは異なったブツダが大乘經典には幅広く説かれておりますが、いったいこれらの仏とゴータマとの関係はどうなっているのでしょうか。

原始・初期仏教の歴史的研究を主要テーマとしていた西洋から、明治期に近代的な仏教研究が取り入れられたとき、彼らからまず指摘されたのもこうした問題でした。大乘經典は歴史的なブツダが説いたものではない、そこに現れた仏は、ゴータマとは関連のない、後代に捏造された仏だというものです。大乘非仏説論の名前で知られるこの議論は、わが国の仏教界を驚嘆させてしまいました。

それ以後わが国の学界では、大乘非仏説論に対する弁明が重要な研究テーマの一つとなります。その研究の中から、出

ブツダ  
仏とは何か (下田)

家部派にルーツを求める「大衆部起源説」、そして在家教団をルーツとして想定する「在家・仏塔起源説」の二つの異なる学説が誕生しました。確かにこの両者の解釈は、まったく異なった視点から仏教史を描き出そうとしたものですが、しかしこの何れの学説も、大乘仏教の「起源」が仏教の歴史的起源であるゴータマにまで遡り得ることを根拠としている点で共通します。つまり、仏教の起源に一人の人間を想定しないと歴史的正当性が得られない、という理解に立っているのです。

そうしますと、ブツダとは何かという問いを考えた場合、詰まるところ、大乘の正当性を立証した研究の流れにおいても、大乘のブツダはゴータマとは異なった、その意味で二次的なものと理解されていることは、変わりがないこととなります。

現在、少数の例外を除けばインド仏教の研究者たちは、歴史実在のゴータマと大乘のブツダとの関連性は問わないまま、つまりはブツダとは何かという統一したテーマを小乗、大乘に対して立てることなく、それぞれの領域に閉ざして研究を進めているように私には思えます。

## 七 神格化あるいは神話化

現代の仏教研究者の間には、ある強固な観念が存在します。

それは、最初は普通の人間だったブツダが、後世の仏教徒の手によって徐々に神格化され、やがては神話的装飾に満ち溢れたブツダ観に至る、というものです。これを人間ゴータマの「神格化 deification」「神話化 mythologization」と呼びならわしております。

この理解に立って、<sup>へ</sup>実証的な<sup>な</sup>結果を求めようとする研究者たちは、神格化される以前の「人間としてのブツダ」の探求に向かいます。「脱神格化」、「脱神話化」と呼ばれる方法によって、つまり現在遺された文献から、徐々に大袈裟な装飾を取り去って行けば、やがて本来存在したはずの「純粹な人間ブツダ」が再現できるはずだ、と考えて仏典に向かうわけです。

科学としての仏教研究は、文献学という厳密な方法を持っています。使われている韻律の相違、術語の洗練度、写本の年代、同一主題を持つ異なる文献の比較など、いくつかの方法によって古い文献を選び出そうとします。それは貴重な試みです。ところがこの方法にのみ従って歴史的ブツダを描き出そうとしても、歴史的ブツダの生涯を描くに足る資料がないのが実態です。そのため研究者たちは、装飾に満ちた記述が入ったブツダの伝記文献を利用し、そこから理性的な人間ブツダが描かれるよう、記述を取捨選択するのです。

## 八 口伝世界の歴史と神話

けれども、今述べましたように、そもそも現存する文献でブツダの行状を描いたものは、その何れもがブツダを単なる人間として捉えてはおらず、多かれ少なかれ超越的な性質を持ったものとして表現しております。文献に操作を加える前に、まずこの事実をしっかりと認識しておく必要があります。

ここで、仏教文献の成り立ちについて考えておきましょう。そもそもブツダの教えや行状は、当初は文字による文献資料として遺されたものではありません。伝承は口伝によって保存されていきます。

口承の作品は文字による作品とは大きな相違点があります。そこにはわれわれが考える意味での歴史的記録を保存するという意図は存在しにくいし、何より保たれ難いと言われています。オーラル社会では伝承の専門家がいて、彼らが伝統的に有するストックフレーズを一定の韻律に載せて暗誦していきます。何か特定の事件が起こったとき、それはすでに存在する枠の物語に組み込まれ、若干の改変を伴って伝承されます。それがやがて文字化されて遺されたのが現在の仏典です。かつてエミール・スナールという大インド学者は、ブツダは歴史の実在ではなかったという可能性を指摘して話題になりました。ブツダの伝記を辿れば、インドの太陽神話に解体

されてしまうというのが主な理由でした。このことは実は、口伝社会での伝承の特徴を的確に表した事例と見てよいのでして、けっして新奇な説を述べたわけではないのです。

こうしたことを考慮に入れれば、具体的に厳密な方法を欠いた「脱神話化」という作業がいかに危険をはらんだ文献操作であるか、改めて問題になるはずです。口伝は共同体の財産を用いて、共同作業によって果たされます。それがブツダという個人を主題としはじめたということ自体、古代インド世界においてはまことに大きな変化だったのですが、それはわれわれが考えるような客観的歴史記録を作成するという目的によって生まれたのではなく、むしろ彼らにとってブツダの出現が神話の根底に響き、さらにその枠を壊すような大きな事件の発覚であったため、物語として残さざるを得ないという意識に駆られて作られていったのです。

## 九 カリスマとその物象化

いかなる教団においても宗教的威力、いわゆるカリスマは、通常、教祖において最も強烈であり、世代を経るごとに減じてまいります。これは仏教においても同様だと考えて問題はないでしょう。ゴータマに直接出会った弟子たちの感銘は、次世代、次々世代の者たちより、はるかに強かったはずで、絶望の中でブツダに出会い、そこから立ちあがる力が与えら

れた実感は、誰にとっても希有で奇特な思いとなるものであり、そのブツダが特別な賞讃のことばによって表現されることには何の不思議もありません。ブツダとの出会いは、どれほどの言辞も追いつかない経験だったかもしれません。

しかし、ここでもそうした経験の伝承は、社会にすでに存在する一定の枠に嵌められざるを得ません。口伝社会の宿命です。加えて時代を下り、ブツダとの直接の接触から遠ざかるにつれて、ブツダをめぐる表現は徐々に固定化し、完全に決まり文句と化すこととなります。そこでは、ことばは躍動生を失い、それとともに質から量への転換が起こります。例えばブツダの力を表現するとき、奇跡を起こし、神通力を駆使し、自由自在に教化していくという、当時のインド社会に共通に受容可能な「威力の表現法」が採用され、やがてそれは決まり文句の過剰な繰り返しに転化することになります。

こうした変化を、「神格化」「神話化」と表現することは、適切ではありません。神格化とは、先に申しましたように、本来は人間だったブツダが、信者たちの過大評価によって盲目的に崇め奉られる行為と捉えられています。しかし神話は仏教に先んじて存在しているものであり、ブツダを伝承するためには、その枠を取らざるを得ないことは既に申しましたし、ブツダのカリスマ性はもともと存在しているものなのです。そうではなくこの変化は、ブツダをめぐる表現が固定化し、

その固定された表現を用いての讃辞が量的に過剰なものとなつたと考えるべきだと思います。時代を経るにつれ、仏教経典の文体は、ある特徴をもって変わってきています。こうした趨勢の中で、言うなればブツダの世界を表現する「通貨単位」が決まり、ブツダに対して最高値をつけようとする試みが、結果として同一単位による過剰な桁数の値段設定になつたものであります。ブツダの価値が最高であることについては、ブツダ在世中から認められていることでありまして、ただその評価の表現手段が変わつただけなのです。

#### 十 仏像の不在と人物化

古代インド仏教世界において、ブツダの姿は、初め数百年は人物像として表現されず、足跡、仏塔、法輪、樹木、台座などによって象徴されてきました。それが紀元後一世紀頃、ガンダーラとマツラーとに、ほぼ同時に人物化されたブツダ像が登場します。ブツダ以外の神々や弟子たちは、早くから人物像として描かれていますから、ブツダのみの人物化が長い間に亘って拒まれていたわけです。これが数百年を経て漸く人物化されるわけですから、ブツダは時代を下るにつれて神格化されたのではなく、逆に人格化されたことになります。インド仏教の美術世界は、そのみで独立し、閉ざされた領域を作り上げているわけではありません。それはブツダの

伝記を伝承する他のさまざまな分野と共同の場において、そのモチーフを決定し、描き出していることが分かります。仏教美術の研究が文献研究と並行して行われるのはこのためです。

従つてこのブツダの人物化をめぐってインド古代美術の世界に起こつたできごとは、仏教全体のできごとと考えたほうがよいのです。つまりブツダが時代を経るとともに「人格化」されたこと、それはインド仏教全体の変化を受けて成り立っているわけです。やはりここでも、ブツダが時代を下るにつれて神話化され、神格化されたという理解は、通用しません。

#### 十一 メタファーの解説

既に述べましたように、仏典中のブツダをめぐる記載から、われわれの目に映る「非合理的な」記述を取り去つてしまえば、ブツダの姿はほとんど明かされません。ここで一例を取つて、実際にブツダ伝記をめぐって研究者たちが判断していることを概観して見ましょう。

ブツダの母親がマーヤーという名で、子供がラーフラという名であるということは、実は、太陽神話に溶け込んでしまっています。ブツダが太陽であり、太陽が生まれると闇（マーヤー）は消えてしまいます。ラーフラとは蝕の神であり、太陽と敵対関係にあつて邪魔をする存在です。ブツダが生まれてすぐ



母親が亡くなったといわれていること、子供が産まれたときブツダにとって障害が現れたと述べたこと、これは太陽と共存不可能な間、蝕の関係を考えたとき、あまりにも適切過ぎる命名になっています。これほど神話的であるにも関わらず、この記述を歴史的事実から退ける学者は、日本においてはほとんどいません。

それに対して例えば『律蔵』「大品」冒頭部分、それはブツダの降魔・成道の場面から始まりますが、ここでは竜がやってきて、成道前のブツダをぐるぐる巻きにし、雨風から護る場面があります。この場面を考察の対象にする学者は、私の知っている限り、またほとんどいません。あまりに荒唐無稽で考察に価しない、神格化あるいは神話化の最たる事例と判断しているようです。ところがオックスフォード大学のリチャード・ゴンブリッチはこの記述に注目し、現代のスリランカにおける出家の儀式にこの場面が再現されることを看取し、ナーガ信仰と仏教との密接な関係を指摘しています。つまり、この場面は歴史的事実の何物かを物語っていると読み取っているわけです。

さて、この二つの対立する事例から教えられることは、仏典を読む態度へのヒントであります。何れの場合もブツダをめぐることがらは、何らかの「体系的な意味」の中にうまく収められていることであり、その体系の中で個々の情報を

読み取らねばならない、つまりはメタファーを解説するようになさなければならぬことです。前者であれば、ブツダの存在を中心とした母、子との別れが、太陽と相容れない天体をめぐる隠喩であり、後者であればナーガ信仰、あるいはトーテムズムと仏教入信との関係の暗示であります。こうした態度とは無関係に、文字文化に特有の「歴史資料」として仏典の中から「事実」を取捨選択しようとするのは、本来の口伝資料解読には向かないのです。

## 十二 仏典の多様性

われわれはものを読む場合、相手となる文献の種類によって、すでにそこに向かう態度をある程度決定しています。週刊誌を開く場合と大切な人の遺書を開く場合とは、第一頁を開く態度は、まったく異なっています。そして文献の読みの態度は、この第一頁を開くときにすでに決定されています。さて、仏典はどんな文献なのでしょう。週刊誌、新聞、製品のマニュアル書、記録、報告書、論文、小説、日記、遺書。これらのうちどこに属するかによつて、われわれは予め読みの姿勢を決めてしまいますので、ジャンルの決定は重要な問題です。

結論を言えば仏典は、このあらゆるジャンルに属するものと考えておけば問題ありません。あるものは瞑想法を記した

マニュアルであり、さらに事件の報告書や裁判記録、また思索を整理した論文、在家者に向けた小説、戯曲、一人称で書かれた日記、そして最期のことばを遺した遺書でさえあります。

これらを読み解くには、その内容が何処に向かって開かれているか、その背景となる世界は何か、それを同時に把握せねばなりません。その方法は、やはり隠喩、メタファーを読み解く方法であります。説かれたことばをわれわれの立場で裁断するのではなく、当時の姿に戻って理解しようと努力をすることです。

### 十三 〈理性的人間〉という前提の問題

「ブツダをめぐる記述を当時のインド世界内のメタファーとして読み取る」。この態度と真つ向から対立するのが、ブツダを「理性的人間」であると前提し、その理解と矛盾しない記述を「本来のもの」として採用し、それに沿わないものを「後代の神格化」として退けようとする、現代の研究者が陥りやすい態度です。

仏教学者たちは、ブツダを理性的な哲学者としてのみイメージする思い込みをなかなか離れることができないようです。ブツダを理性的な人間と見ることは、もちろん間違いではないでしょう。しかし、ブツダをその唯一の属性に限定してし

まうにまで極端になれば、それはもはや誤りだと言わねばなりません。そもそも「理性的人間」とは西洋に生まれた概念であり、古代インドの文献を読み取る際にどれほど適合するものか、本来、慎重な検討を必要とします。そうした概念をインドの世界に応用してみようという試み自体は、一定の意味を持っていると思いますが、しかしその一視点をもって、全資料を篩い分けるフィルターとして使うのは、あまりに無謀な試みであります。

ある種の古代の学問は、民衆ときわめて近い世界にいることがしばしば指摘されます。殿堂に閉じた学問ばかりでなく、市井に開かれた学問が存在するわけですし、後者においては実際に民衆を動かせないならば、その存在意義はなきに等しいものです。ブツダの披露する学問の一部は、明らかに後者の立場に立つものでありまして、単に専門家に向けた、純粹に思索的な内容ばかりを扱ったものとは考えられません。われわれの言う理性では超えられない壁、むしろ非合理的な世界さえを取り込む説得力を持つことによつてこそ、民衆ははじめて動くのですから。

こうした問題を考慮した上で、さらに前に述べた初期仏典のジャンルの多様性を考え併せるなら、理性的なブツダに焦点を専一に合せて仏典全体を読み解くことの危険は、十分に予想されるはずで



から見られる仏典に共通の特徴であります。ブツダという他者との出会いがなければ、自己の世界にも気づき得なかつたという自覚が、弟子たちにははっきりあります。

こうしてそれぞれの弟子たちの活動は、その個性に応じて、ブツダとの出会いを中心点とした半径の異なるさまざまな同心円を描く運動になります。仏弟子たちの中に力として残つたブツダは、まさに宝として、歴史的ブツダが滅した後も存在しつづけます。法、つまり教えであれ、僧、それを実践する者たちであれ、それはこのブツダから与えられた力をめぐることがらとして、はじめて意味を持つことになります。この意味で仏宝は、法宝、僧宝に先行するのです。

## 十六 ブツダと自己

こうなりますと、ブツダとは歴史的人物でありながら、かつ自己の中に存する根源的な運動であるという二つの面が生まれてきます。原理的に考えるなら、前者はまことに限られた数の、ほとんど零に近いほどの数の直弟子たちにしか持ち得ないブツダ観です。とすれば、全仏教史は後者のブツダ観によって成り立っていると申してよいでしょう。

ここまでくれば「帰依三宝」は、原理的にいつの時代でも可能になります。ブツダの存在は、肉体としてのゴータマではなく、自己の内に運動を引き起こす力、影響、はたらきと

してのゴータマになりますから、それは仏入滅後も存在しつづけるわけです。

ブツダ入滅後の仏教徒は、こうしたはたらきとしてのブツダにしか出会いようがありません。しかもそれは具体的には法、ダルマと、僧、サンガを通してという方法に限定されることになります。ブツダに帰依をするためには、同時にダルマとサンガとに帰依をせざるを得ないわけです。

先に、三宝は仏宝が他の二宝に先行すると申しました。成り立ちとしてはその通りなのですが、しかし実際的な手段としては、仏滅後の仏教においては、ダルマ、サンガがブツダに先行することになるはずですが、もつとも、仏教の歴史の中では、ブツダは仏塔や図像として表現され、自己の内なるはたらきとしてのブツダが物象化されております。このため、あたかもブツダ自身に、単独に帰依をすることが可能であるかのように錯覚をするかもしれません。しかし、法、僧と切り離された仏は、実際には歴史、伝承から切り離されて浮き上がった、幻でしかないでしょう。

## 十七 歴史と超歴史

このように見てきますと、ブツダは特定の歴史上の存在でもあり、また特定の歴史を超えて存する実在にもなります。ブツダに直接出会い、ブツダの入滅を経験した弟子たちは、

歴史上に存在したブツダを、自らの全存在を通じて、次の歴史上に「はたらき」として存在させるように試みていきます。

経典は「如是我聞、一時仏在……」から始まります。経典の冒頭において、伝承の中でまず確認されねばならないのは、「自己の存在」と「ブツダの存在」であります。この二つは同時に存在が確認される事柄となっています。この確認は経典の成り立ちにとって重要な要素です。この経典で語られるブツダは、かつて歴史上の特定の時期に存在した歴史的ブツダですが、それが自分を通して現在に呼び戻されているのです。

口伝の世界では、ことばの語り手は重要な意味をもちます。口伝である経典は語りを除いては存在しませんから、ナレーターが語り始めるときに一頁が始まり、語り終わったときに経典の最後のページが閉ざされたこととなります。語り手は、経典そのものを成り立たせていますから、ブツダのことばをも成り立たせています。より正確に言えば、過去のブツダのことばを現在化しています。

これが「伝承」の意味であります。過去は現在化されることとがなければ単に過ぎ去って影響を持たない死骸にすぎません。伝承は、死骸を受け渡すことではありません。生きたものでなければ、伝承する努力は意味をなさないでしょう。こうして初期仏教の経典においてもすでに、聞き手と語り手が

一つになって、ブツダを求める構造が出来上がっているのです。

## 十八 小乗涅槃経

このことがもつとも典型的に現れているのが、冒頭に申しました『小乗涅槃経』であります。この涅槃経はブツダの入滅について記しています。これまでの研究者たちは、ブツダ最期の旅を記録したものととして、ことのほか重要視してきました。たしかに、この経典の中には、ブツダの最期についての何らかの史実が反映されている可能性は否定できません。しかし、この経がブツダの入滅を主題とし、歴史的ブツダの不在を説こうとしているものだとするならば、今述べました「経典成立の前提としてのブツダの存在確認」ができなくなってしまう。とすれば経典自体が成り立たなくなるのではないのでしょうか。

けれども実際には涅槃経では、入滅後のブツダの存在を示唆する重要な記述があります。それはブツダが入滅の瞬間禪定に入ったこと、そして火葬によってもブツダの遺骨は損傷されなかったことの二つの記事です。ブツダは入滅していなくなつたのではなく、涅槃界に行つただけであり、しかも現在存在の拠り所となる骨はそのまま清浄なものとして遺されました。

こうして、小乗の涅槃経はブツダの入滅をトピックとしながらも、結論としてはブツダの永遠性に踏み込んだ発言をなしているわけです。ブツダの存在は、仏教にとってどうしても必要なものですから、単に入滅の記録を作るという発想は、經典の作者あるいは伝承者たちには見られないのです。先に見ましたブツダの涅槃と、それを契機に自己のうちにブツダを引き継ぐ世界は、この涅槃経でも基本的な前提となっております。

## 十九 大乘のブツダ観

自己のうちに歴史的ブツダに起源する運動が確認され、その運動が法、僧を通して継承されるところにブツダの存在が確認されるのなら、そして、絶えず起源にあるブツダを、現在の歴史に呼び出し、現在化することによって起源のブツダの活動が認められるなら、ブツダは継承される個々の歴史の中で再生されることとなります。これこそまさしく、大乘仏教におけるブツダ観です。

『法華経』におけるブツダであれ、『阿弥陀経』におけるブツダであれ、それは歴史的存在としてのブツダである釈尊とは区別をされていますね。それでいて必ずゴータマ・ブツダとの深い関係が顕わにされています。この関係をこれまで研究者たちは、勝手なブツダを捏造するための便宜としか見な

かったようです。時代を下ってゴータマ以外の仏を創り出すために、ゴータマと関係を持たざるを得なかったとの解釈が最も多いようです。あるいはかなり進んだ考察にしても、大乘特有のブツダ観として、ゴータマとは切り離そうとします。

ところが、これまで見てきましたように、歴史的ブツダであるゴータマに出会ったわずか一握りの人たちは、その後の膨大な数の仏教徒たちに、ほかならぬブツダの存在を伝えつづけました。後の時代の人々にとっては、ブツダに出会うことは、ゴータマという肉体に出会うことであろうはずはなく、分かりやすく言えば、伝えられる実感、感動に出会うことであります。それは、伝え聞いた過去が、現在として、現存する自己において蘇ってくることであり、そのとき、ブツダは、ゴータマに限定されない、「より根源的な名前を持つもの」として表現されはじめます。これこそが、伝統仏教に見られる過去仏思想であり、あるいは大乘經典に現れるさまざまなブツダであります。

## 二十 仏教の真理

インドに固有の伝統的真理と、仏教が出現して後の真理との間には、実は真理の現われ方をめぐって看過できない差異が存在しているのですが、それが、今述べたブツダ理解と深

い関係を持っていると考えられます。

インド本来のヴェーダ宗教においては、真理は歴史上の人と関わりなく永遠の過去より存在しており、司祭をはじめとする人は、その真理の単なる媒体として活動するに留まりません。真理を開くのは、歴史上の特定の個人である必要はありません。真理を開く資格は、ジャーティによって限定されているのであり、個人に存するものではないのです。

ところが仏教においてはゴータマという個人が居なければ、その真理は存在することはありませんでした。ゴータマの初説法によって真理はようやくこの地上に姿をあらわしたのです。そこでは真理と特定の個人との関係は密接であり、切り離すことができません。

周知のように、「梵天勧請」の説話において、ブツダは説法を躊躇します。これは実は伝統的なインド固有の真理観と、仏教によって生まれた真理観が対峙される場面でありまして、仏教徒は「ブツダの説法によって真理が現れた」ことを、ブラフマンを通して承認させているわけです。当然、伝統的なバラモン宗教の立場から見れば意味をなさない説話でありましょう。

しかしながら同時に、たとえブツダが真理を開顕したことを認めたとしても、インドの世界においてブツダは真理を創り出したわけではありません。あくまで開き顕したのであり

ブツダ  
仏とは何か(下田)

ます。とすれば仏教の起源の歴史的ブツダ・ゴータマであっても、ある意味で真理を歴史の中にもたらした媒介者に過ぎないわけです。したがって次世代の仏教者の中から同様な媒介者が現れることは当然予想されてよいわけですし、こうしてインド世界においては、ブツダは無数に出現することが認められるようになります。「創唱宗教である仏教の真理は、歴史的な存在を通して現在化されたものである」。大乘仏教の仏たちも、この真理構造の中から生まれてきているのです。

## 二十一 最後に

わたくしたちは、結論としては、ずいぶん当たり前の結果に行き着いたようです。ブツダが歴史的な存在の釈尊でもありながら、かつ、その根源となる真理そのものでもあり、また現在の歴史として現れるブツダでもあるとするなら、これこそは各地の伝統の中で、仏教徒たちが理解してきたブツダそのものではないでしょうか。歴史的ブツダ、つまり釈尊の存在を認めつつ、人々が他の新たなブツダをも同様に認めることは、少しもおかしなことではないのです。

このことを認めさせない力として働くものは、いったい何でしょうか。ブツダが歴史的な存在であったゴータマのみであり、他のブツダが捏造物に過ぎないのなら、ブツダの継承や存続は意味がありません。そこでは法・僧の二宝が存在して

いればよいのであって、仏の存在は意味を持たないはずで、近代仏教研究は、ことにわが国において、事実上、三宝ではなく二宝の存在を立証してきたように思います。

こうした強固な態度を産み出してしまふ原因の一つは、「仏教の起源に純一なものを措定したい」という欲求であります。その純一なものとは、ここでは具体的には「理性的人間としてのブツダ」を指しますが、複雑で混沌とした存在を、研究者たちは、何かしらへ得体の知れないもの、ときにへいかがわしいものとして敬遠する性癖があり、できるだけ単一で、純化された存在を求めようとするようです。

ところが結果として伝わった仏教は、けっして単一、純一なものではなく、むしろ説明が付き難いほどに複雑多岐な様相をしています。この現象を前にして、研究者たちは、「その中には、正しいものと間違つたもの混在しているからだ」と考え始めます。そして「正しい仏教は同質の正しい起源に、間違つた仏教は同質の間違つた起源に発しているはずではないか」と理解し、仏教の起源にあるブツダは、純一な、無誤謬な、理性そのものでもいふべき人間として仮定されてしまふのです。

しかし考えてもみてください。こんなことが歴史的な、実証的な研究から帰納されることがあり得るでしょうか。たしかにもともと、ブツダの姿は、ブツダ自身が弟子たちに刻印

したものと考えることができるでしょうが、そのブツダのイメージを後世に向かって表現したのは、つまり刻印したのは、ブツダではなく弟子たちです。となれば、今われわれに残されたブツダをめぐる伝記資料は、ブツダ自身の表現なのか、弟子たちのブツダをめぐる心象の表現に過ぎないのか、けっして一方に決着できる問題ではないのです。しかも、弟子たちの個性は多種多様で、理知的な弟子から感性的、あるいは情緒的な弟子まで、律法的に厳しいものから、感性的に自由なものまで、際限なく、幅広く存在しています。資料が示すブツダが、まさにこの複合体としての存在になるのは、当然のことであります。けっして純化され、結晶化された単一な存在などに落ち着くはずはありません。

しかし、「研究」は、果と同質の起源を立て、その起源から予定された結果が生まれるような、単純な体系を設定して行うほうが、はるかに簡単です。それは何よりも「分かりやすい」ため、他に対しても説得力があります。もちろんこの「分かりやすさ」はきわめて危険なものなのですが、何れにしてもこうして、複雑な存在をできるだけ単純なものに解体し、かつその中から純一なものを目指して選別する作業が進むことになるのです。

けれども実際には仏教の歴史は、まるで膨張する宇宙のよう、現象としては、起源からどんどん拡大しております。



宇宙の起源がどうあったのかを探るためには、現在に展開した宇宙の全現象を相手とせねばなりません。わたくしは、ブツタとは何かを探る研究も、同様の方法によってこそ進む気がしています。まずわたくしたちは、資料に現れた複雑なブツタをめぐる叙述を複雑なままに記述し、そして今度は、その複雑さができるだけにも収まる、新たな次元を模索していかねばなりません。もしその作業が成功したなら、そのときは、釈尊とさまざまな大乘の仏が共存するに至った、仏教の歴史の訳柄が、手に取るように明らかになるかもしれない。そんなことを未来の研究に期待し、またわたくし自身の課題としたいと思っております。ご清聴、ありがとうございます。